

第67回 公開講座

障害者差別と福祉支援 — 忘れられた女性障害者 —

日 時 2011年10月28日 (金) 13:00~14:30

場 所 千里山キャンパス 尚文館 1階 マルチメディアAV大教室

講 師 加納 恵子 (社会学部教授)

日本のフェミニズムを牽引してきた上野千鶴子は、東大での最終講義に「生き延びるための思想」を語った。「私って何?」と、社会学専攻の大学院生時代に問い始めて40年、まさに、不惑の「フェミニズム」という社会思想を構築した。

ならばと、私も彼女に倣って、女性障害者のかけがえのない経験を言語化し、理論化してみようと思立った。理論とは、経験を説明するための道具/装置であって、恭しく崇めたてるといよりは、どんどん上書き、更新していく類のものであろう。

この意味で、今、福祉実践理論に最も欠落している知恵は、援助する側の理論ではなく援助される側の主体的な理論である。ちなみに、女性解放運動家でもある上野と障害者解放運動家の中西庄司は、社会的弱者論や専門職論を議論する中で『当事者主権』(岩波新書 2003) という概念を紡ぎだした。当事者学のバイオニア2人の必然的な邂逅である。曰く、自分たちの営みとは、それぞれに、社会の支配的マジョリティから定義づけられ客体化されてきた、いわゆる「社会的弱者」の「自己定義権」を奪還する運動ではなかったかと……。かくして、その運動は「弱いままで主権者になれる社会システム」を目指すことになる。上野流に言えば、「強者になるための思想」にからめとられることなく、「弱いままに生き延びる思想」であろうか。

さて、福祉援助関係論に話を戻すと、こうした圧倒的な力関係を不問にしたままで、豊かなケア実践の構築や社会変革への経路ができるとは到底思えない。ケアをめぐる美しい物語の陰には、ケアをめぐるおぞましい物語が隠れているものだ。「援助関係」の非対称性は、社会構造を象徴的に映し出す鏡でもある。専門職の倫理綱領を頼りに、せいぜい信頼に基づく援助契約上の協同戦線で、財源・資源不足と果敢に闘うRPG(ロールプレイングゲーム)のシナリオを共有するのが関の山である。状況が変われば、福祉の名の下に支援は支配に、見守りは見張りに変質しかねない。

少々言葉が過ぎたが、福祉研究者として、こうした自己矛盾/否定に近い問題意識とも格闘しながら、今回は「女性障害者問題」について以下の構成で読み解きたいと考えている。

1. 女性障害者問題を論じる今日的意味:
近代規範の能力主義とセクシズム
/ダブルハンディとダブルバインド/複合差別と多問題
2. 女性身体規範をめぐる:
「正常な身体」と整形ノーマライゼーション
3. 排除型社会の過剰包摂/寄り添い型支援のジレンマ
4. 支援シナリオのリライト/セルフヘルプとピアグループ

* 加納恵子『女性障害者問題を読み解く—「女性身体規範」をめぐる—』、林千代編著『女性福祉とは何か』ミネルヴァ書房 2004 他

* * *

● 聴講無料 予約は不要です。多数のご来場を歓迎します。

手話通訳が必要な場合は、10月20日(木)までに人権問題研究室へご連絡ください。



THINK×ACT
KANSAI
UNIVERSITY

関西大学人権問題研究室

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35 阪急千里線「関大前」駅下車
Tel 06-6368-1182 Fax 06-6368-0081

ホームページ <http://www.kansai-u.ac.jp/hrs>